

# 南方（比島）

## 「悲愴比島戦線の苦勞」

### 慰 靈 紀 行

兵庫県 松田 勇

私は大正十（一九二一）年生まれです。同年輩の人達が全国的に一番たくさん戦死されました。「やれ聖戦だ」「大東亜共栄圏の確立・五族協和」と、その理由・理屈は如何様であろうとも、只一途に国命に従い、故郷を偲び、肉親を思いながら異国にて「草むす屍、水漬く屍」と化されました。幾千万の戦友・同胞たちの霊位のご苦勞、ご無念を偲び、その戦場の様相を生還者の我々は存

命中に語り伝える義務があると思います。

私は国民精神総動員令（国命）にて軍属となり、召集令状にて軍人として、中部第五十四部隊に入隊、第一期の検閲を受けて満州第二百二十四部隊へ転属した。約二年間は対ソ（ロシア）戦闘訓練に明け暮れ、その後南方戦線へ移動して、台湾經由フィリピンに出動、第十四方面軍山下奉文軍司令官の隷下に入る。

「捷号作戦」時の昭和十九（一九四四）年十二月二十三日、比島上陸。昭和二十年九月十日、山下大将より「尚武作戦命令、停戦」一片の紙きれで銚を納めよ、だった。僅か九カ月余り。残酷・悲愴・惨劇と筆舌に盡くせぬ戦場だった。

九月十九日 (ジヨネス) 武装解除

二十三日 (エチヤギ飛行場) 各軍団集結

二十五日 (移送) バレテ峠通過「黙禱」

二十八日 (カランバ大収容所) 「PW」

以後、ケソンやマニラにて労役に服した。十二月二十三日、北サンフェルナンドに移送され、作業隊として働かされ、昭和二十一年十二月末に復員した。この間計四年九カ月、復員の日まで母親が陰膳を供えて下さった由、有難く心より感謝しました。以来、光陰矢の如く、年々歳々、吾が刎頸の友も、一人逝き、また一人去る。昨今の心中寂しき極み。

遡る昭和四十七年、サイパン島に横井庄一さん、二十七年ぶりに生還、全国に衝撃が走った。厚生省は戦跡調査並びに遺骨蒐集団を派遣された。フィリピンのルバング島に小野田寛郎さんを発見復員させた。時の調査派遣団員に、元鉄兵団司令部の副官でおられた柏井秋久氏の有るを知る。戦友達は相喜びました。

その原理には、戦いに敗れ、多くの戦友の聖霊の眠る彼の国に、後髪を引かれる思いで復員船に乗り、甲板に立ちて、ルソンの島影消える時に、頬を伝い流れ出る涙を拭いもせず、吾れまた機会と生命があれば必ず慰霊に訪れるぞと、心に強く念じたことにある。

あれから三十二年を経た。仏式で申す三十三回忌の昭和五十二年。前述の柏井秋久氏の談によれば、比国政府及び国民の対日感情は「稍々良好」との由。誠意をもって接すれば、理解を得る事必定也。戦友有志相集い、御遺族にも呼び掛けて、旅行社と打ち合わせ、日程行路等々の案件をすべて完了す。昭和五十二年二月に「第一次訪比現地慰霊団」を結成して挙行、爾後昭和五十八年まで六度、私は参加致しました。ここに総括して発表致します。

挙行の都度、戦友ご遺族各位にはお世話様でした。また各戦跡での祭式には「神式・仏式」併せ

挙行。姫路護国神社より賜わりし「神札・大抜詞」、仏式では臨濟宗妙心寺派・見星寺松原祖仙老禅尼、同住職素弘禅尼様、真言宗生福寺住職西坂裕将師、瀬戸内海に浮かぶ小豆島護国寺管長平野如真大僧正猊下と、皆様の献身的ご協力をいただいた。御蔭にてそれぞれ英霊の眠る地に参拝できました。

前述の見星禅寺には歩兵第三十九連隊の慰霊碑を建立されており同隊の菩提寺です。同寺院にて第一次慰霊団の説明会並びに結団式および宗門の輪袈裟を戴き、当時は渡航先の疫病の關係で三種混合注射を行った。為替レートは一ドルが二百四十円でした。なお比島は過去数百年スペインに支配され、通貨はペソです。米国の属領期間も長くドルも通用します。第一次慰霊団の時は、ケソンシティとマニラ地区は戒厳令発令中だった。単独行動や夜間外出厳禁です。

勿論私達は、通常の旅行者と異なり、フィリピン政府観光局発行の「平和の集い推進協会員」と

して登録され「写真、氏名、生年月日、会員Noのネームカード」を胸に着けており、全国各機関において優遇協力されました。戦跡巡拝携行物品も慰霊祭用品と、各地域別に土産物等を戦友で分担し、特に個人必携の医薬品、奥地は電灯が無いために懐中電灯、そしてその電池から糸針に至るまで微に入り細に涉りました。また回を重ねるごとに携行物品・土産物が増大しました。

奥地の学校、集会所等には柱時計（予備電池を充分補充して）、子供たちには文房具類、大人には衣料や履物、タオル等々を土産物として用意し、また大戦中に直接被害を受けた老人たちには心より慰労の意を表すべく、日本の食料品や缶詰に幾許かの弗札を、そっと手渡しました。都会も奥地の山村も貧困者多く、極く一握りの特権階級の人間が搾取政策を行うという状況で、これは発展途上国の歩む道だろうか。

如月の某日、伊丹の大阪空港に全員集い、通関

を経てタラップに登って機上した。初乗の機内の総てが物珍しく、小さな窓に額を着けて外を眺めた。機関始動、助走路から滑走路を疾走、アツトと思う間に飛び立ちました。天はわれらの壮途を祝福するかのごとく快晴で、白雲二・三片悠々と流れている。眼下に見える播磨灘も往時は真帆片帆の帆船が往来し、白砂青松の海岸線も、現代は臨海工業地帯と化し天高く煙突が林立し、大型タンカーが白波を蹴立てて疾走してる。

三十年過ぎ 慰霊の道は 天翔あまがける

アナウンス高度七千メートル、四国山脈（石鎚山、剣山）ひと股ぎで九州南東洋上を南下、白皚々の雲海なり。

脳裏を巡るその昔。「嗚呼堂々の輸送船、さらば御国よ栄えあれ……」。その輸送船団も敵潜水艦の出没の為、鹿児島湾に一時退避した。沖繩列島はそれぞれの島影に隠れるごとく、台湾の基隆に投錨した。台湾の人達は親切だった。感謝。

機は南国の空だ、真綿のような積雲が陽光に映えて眩しく銀色に輝く、この雲海の下は往年の魔のバシー海峡だろうか。時差による時計の調整アナウンス、着陸近し。雲中に機は突入、機体振動激し。眼下にルソン島現わる。ラグナ湖上空にて右に大きく旋回して着陸態勢に入る。左窓に遠くバタン半島からマニラ湾が眺められた。脚下には椰子の木蔭に、赤や青の原色の家屋や屋根が目に入る。

機は静かに着地、タラップを踏む足も軽く第一歩を大地に着けた。「永年の夢が叶った、胸に熱いものを強く感じた」。只今から数日間が大変だぞ。今朝の大阪零下七度、今マニラは二三度であつた。

ズボンの裾、襟首、袖口から、むっとする熱氣が入って来る。滑走路やターミナル付近に土塁が築かれ、砲座や銃眼があり軍隊が警備している（戒厳令中）。通関口に比島美人が十数人出迎えて、小さな貝殻で作ったレイを掛けてくれ、大変

な歓迎ぶりに驚いた。前述のネームカードのせいかな。見星寺さんより戴いた輪袈裟を首に掛け、念珠を腕に巻き、混雑時やジャングルでは身体の保全を容易にする為に全員黄色の野球帽子を着用する等々これらの準備は総て正解でした。

通関を経て出迎えのガイド・トーマス・コラゾン女史(愛称「コーラさん」)には以後大変お世話になった。人員はマイクロバスに乗り、手荷物小型トラックで随行で、一路「三号国道」をリంగాエンに向かって北進。

マロス北方地点は、第五中隊の全車輛で歩兵第三十九連隊第二大隊山本庄蔵少佐以下を、バタン半島方面に輸送中、敵グラマン戦闘機の襲撃に直面し、車輛はジグザクに停止し、全員の銃火により敵機は退散せしとか。またその直後に、第四中隊がマニラ輸送の時敵襲を受け、軽機射手の多胡正氏が貨車の荷台に仁王立ちになり、グラマン機を撃墜せしこともあった。しかし、初年兵現役の見習士官と上等兵が戦死、また自動車走行中に

後方から襲い来た敵機の銃弾が首筋から喉頭に貫通して散った戦友などなどの御名を車中から呼びながら念仏を唱えた。

アラヤット山(マニラ富士)はマニラ平野の中心にあり格好の目印です。マバラカードに到着。渺々たる草原に野牛の草を食むを所々に散見す。ここに一基の碑あり。碑文には「神風特別攻撃隊第一番機発進基地」とある。愛媛県出身の関中佐が片道燃料で先陣を切って征かれ「敵艦必殺轟沈」された。辞世の一首

「靖国の 桜となりて 薫る日の

誇りを胸に 秘めて飛び立つ」

帽子を打ち振り、戦隊を見送られし隊員の心や如何に。正に「散る桜 残る桜も 散る桜」であった。

北進二〇キロのキャバスに比島軍の大きな記念碑ができていた。全員整列礼拝す。タルラック、バユウイ、マニエル、カルメンと進む右手に三角

山を眺める。往時はこの付近全域は戦場だった。

山下將軍曰く「今次戦闘は空軍と地上戦車戦の優劣で決す」と。しかし上陸以来日の丸の飛行機一機も目にせずだった。「撃」戦車兵団と「旭」

兵団の重見戦車旅団が玉砕戦法で激闘を敢行された所はこの辺だろうか。敵のM四戦車は動く要塞のごとし。M三戦車にしても装甲は五一ミリ重量一二トンです。友軍の九五式や九七式では装甲比較もできぬ。一発の被弾で炎上せしとか。徹甲弾の威力は数倍の差異とか。よって土壕を掘り車体を埋没し砲塔のみ地上に出して防戦せしとか。

リングエン湾に面したダクバンに宿泊す。早朝ホテル前広場に出た。椰子の木陰に旧日本軍の花形飛行機零式戦闘機一機と九七式戦車一輛が展示してある。勿論外形のみで中身は空洞です（後に行った時は飛行機三機と戦車二つになっていた）。朝食もそこそこに、波打ち際に祭壇を設け、日・比両国旗を立て慰霊団名入り幕を張り、御供物も瓶詰め、の清酒と清水、御洗米、餅、世にいう山海

の珍味、それにタバコにマッチとあの当時欲せし品々を供した。灯明を灯じ香を焚き、大抜詞を奉読し、御寺院様の三十三回忌法要のお念仏を頂戴し無事閉式となる。

参集の人達に供物を配って北サンフェルナンドへ向け北進する。途中にアゴーという町を通過する。昔、呂宋助左衛門が開拓せし日本人町だった由。北サンフェルナンドの町を通過して海岸線に出て、ここで慰霊祭を挙行です。祭壇を作り幕を張り、日比国旗を高く掲げ、いざ法要です。見物人も数十人集まる。見星寺松原素弘禅尼様、金蘭の定紋入りの法衣、青々と剃髪なされ、見るからに清々しい頭に観音帽（かんのんもうす）高く聳え立つ禅宗の正装で読経を頂戴致し、裂帛の氣「イエイー」……これで「乾瑞丸」と運命を共にされた。鍋島閣下以下一千二百余柱も泰らかに眠られたと思う。われわれも別れの言葉を奏し、最後に「水漬く屍」を口誦す。

父母や、妻子の知らぬ、リングエン

水漬く屍の 戦友を祈らむ

感無量、泪、見物人にお供えのお下がり配らむとすると、われ先にと手を出して取り合う始末です。子供等を後で並ばせて、公平に土産物を渡しました。また公職に在る町長、教員、警察官等でも、土産物の配分を依頼するのは駄目です。一度手に入れた物はすべて個人の所得です。

ここから約一〇〇〇キロ北方の砂浜が戦後の収容所メインスタックード跡です。また北サンフェルナンド港は北港と南港に別れており、中に突き出したポロ岬は巾二〇〇メートル、長さ一〇〇〇キロ位だった。現在は米軍の通信基地です。最先端にオーデナンスという収容所があり、二個大隊が作業していた。三号国道を南下し、カルメン・ウミンガからサンホセへ進む。道路は泥道で、乾季のため乾き上がり、車が一輛走ると後二〇〇メートル位は土埃です。

サンホセまでのこの付近は搜索第十連隊（鈴木少佐）が布陣し、持前の機動力を利用して敵の進攻

を阻止すべく「玉碎覚悟」と見えた。このため岡本弘之兵団長は転進（退却）命令を発し、歩兵第三十九連隊第一大隊と共に「撃」兵団長の指揮下に入らしめ、サラクサク第一、第二峠にて玉碎的死闘を展開した。生還者僅か数人だった。ここを自動車で驀進しているが随所に皇軍戦士の眠る「草むす屍」地点がある。

サンホセにて給油中にコーラ女史と市場に買物に行く。現地食はヤシ油の臭いが強烈で、私は少々苦手だ。果物は充分頂ける。パレテ峠に向かう。少し坂道を登り平坦地、また坂道を登り平坦地とつづきブンカンに到着。ここまでの左右の山も谷も各隊戦士の血潮で染まったことでしょう。

それぞれの丘陵も峡谷も、向こうの峰もこの谷も、当時は各々作戦上日本名を付けていた。パレテ峠に向かって五号国道左側陣地。「猫」「鷹」「桐」「檉」「柳」「一本木」その上が「秋風山」と「マレコ」「建武台」「榛名山」「赤城山」。五号峠道右側（東）マロヨン山奥に入ってカラングラン

(スペイン旧道)「妙義山」「雄建台」「金剛山」「親山」「子山」「天王山」「朝日山」、一つ大きく南に有るのが「妙高山」後方の「四王山」。南の山脈が「冑山」「南山」「要山」「北山」、この東が「高千穂」とその前に「牛山」と「禿山」を経て「鈴ヶ峠」となる。これら各々陣地で散華の勇者は一万八千余柱です。想い起せば無限です。

デグデグ河の河川敷に満州より携行の八鍬形天幕を張り自動車隊本部とす。私はこの時にマラリアに罹病、四十度の高熱で三日間意識不明だった。この河原も三十余年で大変形し、橋桁が一〇メートル位だったのが、二メートル程度になっていた。付近も奥地も戦禍で密林が裸の禿山になり、土砂が流出のためと見た。車の前進につれ走馬灯のごとく脳裏を駆け巡る在りし時の様相。

我が部隊は輜重隊で各部隊へ弾薬・食糧等々搬送する任務です。因に陸軍には歩兵・騎兵(捜索)、砲兵・工兵・輜重・通信・その外防疫給

水・制毒・兵器勤務・衛生・經理・兵站基地・野戦病院等々各職務分担が課せられていた。勿論海軍も空軍も当然だった。当初ペンカン・ミヌリに集積した諸物資を、バレット峠を越してアリタオ方面に運べとの指令。ミヌリの橋梁も爆撃で橋幅が半分の所があり、砲車や自動車は慎重に誘導しての渡河だった。上陸以来全軍が不眠不休だった。夜間デクデク河岸近くの常緑樹の大木に集中的に螢が来て、夜目にも明瞭に樹形が判明する。イルミネーションの如し。一瞬なれど戦火を忘れた。

昭和二十年二月一日、天幕を撤収しバレット峠を越えた。サンタフェの前の大和谷(天王山の鉄司令部への裏道)に連隊本部と第一大隊本部第一、第二中隊を位置し、自動車第二大隊は東北東二〇キロのアリタオの対岸マンガヤンに基地を設し、バンパン、バヨンボン方面に備え、落下傘降下部隊並びに糧秣等の収集だった。なお自動車は半地下壕に格納した。

パレテ峠頂上には米軍ダルトン將軍の戦死を悼み立派な慰霊碑が建っている。日本軍「鉄」兵団の慰霊碑も回を重ねるごとに立派になり、サンタフェ町長トム・チャンガイ氏の了承にて立派な碑を建立した。碑前にて平野如真殿下に依る真言密法の大護摩供養を挙行して頂きました。護摩木をはじめ故人の塔婆を奉焼し、炎となり煙となりて昇天す。各部隊陣地を三六〇度にわたり説明申し上げ、各部隊号を奉唱され、それぞれに印を切つての御祈りでした。勇士の辞世。

大君の 辺にこそ散らむ 桜花

今度咲く日は 九段の社

また第十四方面軍政官、平木次郎氏がパレテ峠を通過されて、詠まれし詩。

四カ月 この地ささえし 兵ゆえに（ありき）

我等 十万 生命拾いき

なお第二次慰霊団以降、十七センチ角で身長同寸

の角塔婆を慰霊祭場数を持参した。手作りの陶版を、それぞれ地中に埋めて来た。

パレテ峠で菊花を献じて。

春秋の 野花も咲かぬ 峰や峪

皇国の 菊花ぞ ゆかしく薫れ

峠道も往時は一車線だった。今二車線で舗装されてる。ヘヤーピンカーブは同じだった。中間点で五〇〇キロ爆弾が峠道を半分飛ばしていた。夜間自動車の操縦に苦労した所だ。夜半過ぎに某部隊の車輛が転落し、数十メートル下方より救助の声すれど、東方の空黎明近し。霧が晴れた時点で敵機の来襲は必定なり。自隊の兵員の事を思い「鬼心救されよ」で救助せずだった。

天王山の内懐だった。大和谷、自隊の本部及び第一大隊本部、第一中隊、第二中隊が基地としていた。敵機爆撃及び砲弾の直撃で多くの戦没者が出た場所です。

夕闇迫り来る中において、慰霊祭挙行、前述の西坂裕将師の法式に則り肅々とした読経を賜りま

した。

真木柱 建てて祈らば 深閑と

十字星のみ 光り輝く

サンタフェにて宿泊、町長夫妻・州警察・警部アンチエーター氏、片言の通訳のタゾー氏ほか町の有力者数人來たりて夕食会を催す。早朝出発、本日は強行軍だ。ポネ通過、この陣跡を車中より祈りぬ。戦車撃滅隊の学徒兵五〇〇人が散華した。同年代の前途有為な士、生あらば、国の政治・経済また文化面において偉大な貢献をなしたであろう。アタリオ兵站基地、野戦病院跡を左手に、右手マンガヤンの山麓は第二大隊基地だった。各隊は大型のT型F型の退避壕を作り、車輛は半地下壕で格納した。長い年月で、みな凹地になっていた。バンバン・マラシンを経てピノ峠の麓にて慰霊祭挙行。小雨そぼ降る中、遙かカシブを拝して。

母の御名 呼びつつ 兵のみまかりぬ

カシブの峪に 霧雨ぞ 烟る

カシブに一カ月余りいた。ピチバカンへの転進命令にて、自動車隊の生命知らずの突撃野郎が先陣を切つて密林に向かつて蕃刀（鉞の如し）を振つた。第一日夜が大雨で一昼夜携帯天幕で待つた。十日前に先発隊が出発し、行路表示を行うも、この大雨にて不明になり、最初の第一歩を右と左を間違えたために、多くの犠牲者が出た。鳥も翔ばぬ峰を越え、雲海の空を踏破し、苔むす岩に足を取られ、山蛭に悩まされ、時には猿公の群れに驚き、激流岩を喰む峽を渡る。思えば最初の第一歩の誤りが、僅か七日分の食料で二十日も三十日余りも彷徨した。

そして後に、否と言うほど戦鬪に叩かれ、傷痍の身に熱帯の疫病、加えて食糧欠乏と、幾百千の若者達よ、知る者ぞ知る白骨の杣道なり。あのことこのことと指折り数えても、多数の事柄は胸奥に秘して、あの世まで持つて行き、仏教法話に出

て来る「閻魔庁の淨瑠璃の鏡の前に立つまで」と  
思う。非人道的行為、戦争という名の下に行われ  
た事柄である。角塔婆を建立し

（餓死彷徨の山波を遠く遙か彼方に拝し）

南冥の 鳥も翔ばない ジャングルに

朽ち木の如く 戦友の斃るる

平野如真猯下による真言密法の大護摩供養を挙  
行して頂く。

勿論、内地出発時の準備たるや大変だった。大  
型のダンボール箱に十数個に護摩木から塔婆、採  
火用の松明かりまでである。猯下は法衣の上に、  
閻魔帽を頂き、法式に則つとり肅々と読経を賜  
り、九字を切り印を結ばれた。全兵科の軍人・従  
軍看護婦さん・軍属さん。どうか泰らかに眠り  
下さい。

「妙高山」陣地跡に何を行うか。石碑は建立し  
た。参拝の都度角塔婆は建てて来た。本部陣地の  
前方第四中隊陣地の付近にイゴロット山岳民族が

住み、狩獵と焼畑農耕で生活している。ここに小  
学校の分校があり、合図の音は廢材の鉄骨や自動  
車の廢品の金属を鉄片で叩いて知らせた。

私は彼らは勿論、戦に斃れた戦友の御霊に通じ  
る方法は何かと思案し、寺院の小形の梵鐘がと考  
えた。半永久的に使用に耐え、音色が清く、鑄物  
の鐘は鉄棒等で叩けば破れ鐘になる、それでは無  
意味だ。友達が「鋼管なら大丈夫だ、作つてや  
る」と言つて、直径二五センチ、高さ四〇センチ  
で亜鉛鍍金を施し、小形の金槌も付けた。特に銘  
に付いて注文した。日本語で「平和の鐘」と「二  
六四三」そして現地の人キリスト教徒ですから  
「十字」と「THE・BELL・OF・PEACE  
E（平和の鐘）」を溶接で肉盛して製作して頂き  
ました。

前夜サンタフェで町長さん州警のアンチエータ  
警部等と歓談し、楽しき夕食会を催した。翌朝、  
妙高登山にポーターを八人程依頼した。昼弁当用

と米と梅干に焼のりを炊事に渡した。早朝にコーラ女史が「松田さんポーターが十五人来たよ」でした。今更不要とも言えないから「全員山へ行つて下さい」と言うのと彼らは喜んでいた。現金収入が無いから「日本人は金持ち」と言っていた。

全員バスに乗り、半数はトラックで峠を越えて南の山麓カピンタランから登山です。小学校の先生がガイドとして案内してくれ、トム・チャンガイ町長夫妻、アンチエータ警部等々、総勢四〇人余り。コーラ女史はバスで待機と言う次第です。

今までに何度も登ったが同一コースを通ったことがなく、また谷川の急流を二度も三度も渡って登ったのだったが、この度は学校の先生が山の分教場を知っていたから、至極簡単に「金剛尾根」から「天王山」の前より三叉路を経て、馬の背へと進んだ。眼前に大隊本部壕跡・患者三〇人収容の患者壕が大きな凹地になり、火炎放射器の炎に焼かれた黒々とした岩肌が、長年月にも拘らず悲惨さを留めている。

想い起せば、ミヌリから一の谷側よりM三戦車が進み、南部妙高山にて歩兵第六十三連隊（鳥取）と激戦の末、友軍敗れ、M三の前面に作道シヨベルを付けたタンクトローザー樹木も岩石も取り除き、人員輸送車に兵員を満載して進軍して来た。爆撃と砲撃を徹底的に敢行した後での進軍だった。輜重連隊第五中隊が第一線に、次いで第四中隊、第二大隊本部は最後尾の北部「妙高山」の最高地点に布陣、迎撃す。はからずも「妙高山」は敵のバレット峠攻略最重要戦線だった。米倉大隊長は昭和二十年四月十九日払暁、各陣地激励中に敵狙撃兵の弾丸が頭部貫通、見事な戦死だった。同二十三日、橋本第六中隊長が死力を尽くして突撃され散華された。公刊戦誌にはこの時点で自動車大隊全滅とある（壊滅）。

漫吟

曉風颯爽妙高陣

報國誓乾坤貫鬪

散華英魂痛憤極

嗚咽斷腸聖靈祈

丈なす茅の根元を分け進み、ロクトウ小学校に辿り着いた。学校は廃校となっていた。持参の「平和の鐘」は麓のカピンタラン小学校に持って降りることとなる。角塔婆を建て、お祈りを行う。平野如真管長も巨体に玉の汗を流しながら登山して下さった。祭壇を設け、鐘を撞く事にした。百八ツ・三つ八つ十三と全員が打ち鳴らした。鐘音は峰から峰に、谷から谷へと響いた。「私は今度が最後です。もう二度とこの地に来られないです。もし迷える御霊がおられたら私の肩に止まり、一緒に日本に帰りましょう」と大声で叫んだ。

激戦を 偲びて 心わななきつ

たこつぼの辺に 鐘打ち乍ら 慟哭す  
かくして北部ルソン戦跡巡拝は終わった。

「平和の鐘」は麓のカピンタラン小学校に寄贈した。校長さんは大変喜ばれ、早速「撞き初め」をされた。音色は清く澄み、高天まで届くだろう。

う。この所は前後、左右、日本軍も米軍も比島の戦士もと、多くの戦没者の出た地の中心点です。これから毎日学業に合わせて打ち鳴らして頂ければ幸甚です。

縦貫五号国道を南下。アラヤット「マニラ富士」を右手に見て、マニラに宿泊。翌早朝出発して、南進、モンテンルパの刑務所の北側道路を約八〇〇メートル入った所に「B級戦犯二七烈士の墓所」が。

哀れか、不運か、国の為か、ただ気の毒では済まされぬ気がした。

南進してカランバ、ここは終戦時に日本軍を収容した地です。東に大きなラグナ湖があり。一つの天幕に三、四十人位入れられた。有刺鉄線で囲われた中で毎朝出入口付近に毛布に巻かれた遺体が四体か五体あった。戦線を生き残り、今このような所で生命線が「断絶」、誠に不憫な人生だ。

さらに南へロスバニヨス、ここに山下・本間両将軍の墓所があった。山下奉文は昭和二十一年二

月に戦争重犯罪者として、なお大将は従容として絞首刑に服された。第一次の慰霊行きの時はまだ土饅頭の墓所で、傍らにマンゴウの木が半ば腐つてあつた。その次の訪問時には無かつた。

山下奉文 辞世の一首

待てしばし 勲のこして 逝きし友

あとなしたいて 我れも行きなむ

本間中将は軍人としての処刑で、同年四月に山下大将の墓所から五〇メートル程の地で銃殺刑でした。墓地も直径五メートル位の円座の中央に碑が建つていた。さらに南進し、サンタクルスのお前に「カリラヤ霊園」と命名した政府樹立の「全比律賓戦線戦没者五一万余柱霊位」があり、霊位泰かれとの建碑でした。

以上戦跡巡拝、全六度の足跡を簡略に記しました。ただ二度と戦争の無きを念じます。私たちの国、私たちの地球です。

国の為 呂宋に散りし 同胞の

霊泰かれと 泪で拝す 八十路の爺

米軍反攻下の

フィリピン戦線の衛生兵

東京都 福原良忠

私は大正七（一九一八）年十一月五日、男四人女二人の六人兄弟の三男として現在の東京都墨田区東駒形で生まれました。

徴兵検査は、昭和十三（一九三八）年六月に当時の本所区役所で受けましたが、第一乙種合格ということになり第一補充兵となりました。しかし第一補充兵でしたが、成人に達する頃、既に中国大陸に戦火が拡大中で、早晚兵隊に行かねばならないと覚悟をしておりました。

早くも翌年の昭和十四年十二月十日、臨時召集で世田谷の野砲第一連隊に入隊となり、衛生兵要員として翌年の一月十二日付で臨時第一陸軍病院